



2016年 第32回写真の町東川賞

受賞者発表
受賞式及びフォトフェスタ案内

北海道 上川郡 東川町

第32回 写真の町東川賞受賞作家

＜海外作家賞＞ 対象国：コロンビア

オスカー・ムニョス氏（Oscar Muñoz）

受賞理由：展覧会「Protographs」（Jeu de paume、2014 年、パリ他）及び一連の作家活動に対して

＜国内作家賞＞

広川 泰士氏（ひろかわ たいし）

受賞理由：写真集「BABEL - ORDINARY LANDSCAPES -」（赤々舎、2015 年）及び一連の作家活動に対して

＜新人作家賞＞

池田 葉子氏（いけだ ようこ）

受賞理由：写真集「Monkey Puzzle」（Nazraeli Press、2015 年）に対して

＜特別作家賞＞

マイケル・ケンナ氏（Michael Kenna）

受賞理由：北海道を撮影した一連の写真に対して

＜飛弾野数右衛門賞＞

池本 喜巳氏（いけもと よしみ）

受賞理由：「近世店屋考」シリーズなど、鳥取を中心とした山陰地方の風物を長年撮影し続けてきた功績に対して

第32回 写真の町東川賞審査会委員（敬称略／五十音順）

浅葉 克己	（あさば かつみ）	アートディレクター
笠原美智子	（かさはら みちこ）	写真評論家
楠本 亜紀	（くすもと あき）	写真評論家、キュレーター
上野 修	（うえの おさむ）	写真評論家
野町 和嘉	（のまち かずよし）	写真家
平野啓一郎	（ひらの けいいちろう）	作家
光田 由里	（みつだ ゆり）	美術評論家
山崎 博	（やまざき ひろし）	写真家

第32回 写真の町東川賞審査講評

第32回写真の町東川賞審査会は2016年2月23日に桑沢デザイン研究所で開催された。今回は推薦者のリストを見直したため、その甲斐あって例年よりも多い、国内作家賞54人、新人作家賞53人、特別作家賞18人、飛騨野数右衛門賞24人、海外作家賞12人、計161人の写真家がノミネートされた。委員は午前10時に集合し、ノミネートされたアーティストの膨大な作品を丁寧に閲覧し、食事を挟んで午後1時30分から午後5時過ぎまでの長い審議となった。

国内作家賞は広川泰士氏が選ばれた。最後まで評を二分したのは上田義彦氏で、いずれも華々しいキャリアを誇る写真家である。選考の決め手となったのは、上田氏が集大成としての回顧的な写真集だったのに対して、広川泰士氏の場合は、長年の実績もさることながら、写真集『BABEL』が作家の新境地を拓いていたからである。採掘場やダム、丘陵地の住宅地や原発など、人間による自然の変形と干渉を、どこにでも見られる風景として淡々と切り取って、人類への警鐘となる作品に仕上げている。

新人作家賞は毎年、意見が割れるが、今年もご多分に洩れなかった。それは若手から中堅作家までの層の厚さの証左であると思う。何度かの投票と話し合いを経て、最後まで残ったのは、池田葉子、古賀絵里子、西野壮平、増田貴大、城戸保、進藤環、田口和奈。まったく異なる作風の作家たちが残った。僅差で池田葉子氏が新人作家賞を受賞した。池田葉子氏は近年評価が高まっているアーティストであり、写真集『Monkey Puzzle』は北海道、長野、栃木、東京、愛知、京都、熊本などの日本各地やアメリカ、ベルギー、オランダの何気ない風景を独特のユーモアと色、構成で仕上げた完成度の高い作品集である。

北海道にゆかりのある作家に贈られる特別作家賞にはマイケル・ケンナ氏が選ばれた。水墨画のような詩情豊かな作風で知られる国際的な人気作家であり、あまりにも有名ゆえにかえって授賞が遅れたのではないと思われる。国内外で精力的に風景写真をものにしているアメリカ在住のイギリス人作家だが、北海道との縁は深く、「ケンナの木」として有名になった屈斜路湖湖畔のミズナラを写した作品を始めとして、北海道ゆかりの作品を纏めた『Hokkaido』、北海道から沖縄まで、30年以上におよぶ作品の中から選りすぐった『Forms of Japan』など、そこに住む者が思いも寄らない画像で、日本の自然の美を讃えている。

地域に貢献のある作家に贈られる飛騨野数右衛門賞は、池本喜巳氏に決定した。鳥取を中心とした山陰地方の風物を長年撮影し続けてきた写真家である。『近世店屋考』は靴屋や苗屋、粉屋や散髪屋など昔ながらの個人商店や伝統工芸の職人を30年以上取材し纏められた。歳月が堆積し、昭和で時が止まったような空間に、それぞれが一癖も二癖もありそうな店主たちが味のある表情を見せる。地方にも都市化がおよび、均一的な表情の店舗が多くなる中、人間ひとりひとりの存在感と地場を感じさせる貴重な記録である。

今年の海外作家賞の対象国はコロンビアである。長年内戦や麻薬カルテルの戦争により国内不安を抱えたコロンビアだったが、2002年のウリベ大統領による治安回復が功を奏し、2007年からはフォト・グラフィカ・ボゴタという国際写真祭も隔年で開催されている。地元の協力を得て、楠本亜紀委員がボゴタで調査し、12人の作家がノミネートされた。若手からベテランまでいずれも現代コロンビアを代表する作家である。その中でオスカー・ムニョス氏が賛成多数で選ばれた。パリのジルドボム等で開催された展覧会「Protographs」は、煙や水に溶ける画像を用いて記憶と消滅(死)を考察し、ダイナミックなインスタレーションを実現した。

今年で32回目を数える写真の町東川賞。今回も、「写真文化首都」に相応しい素晴らしい作家たちを選出したと審査会は自負している。しかしこれは一朝一夕に実現したことでも、審査会だけの力でもなく、1985年の「写真の町宣言」から30余年、一步一步積み重ねた町の人たちの努力とそうした趣旨に共感した世界中の多くの人たちの共感の上に成り立っている。「写真文化首都」宣言には以下のように書かれている。「この小さな町で世界中の写真と出逢い、世界中の人々と触れ合い、世界中の笑顔が溢れるように」、そしてそのために東川町は「写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担う」という重責を自らに課している。受賞した素晴らしいアーティストを加え、東川町の人々と共に、また新たな一步を踏み出していきたい。

写真の町東川賞審査会委員 笠原美智子



第32回写真の町東川賞 <海外作家賞>

オスカー・ムニョス (Oscar Muñoz)

コロンビア・カリ在住

Photo by Fernell Franco

1951年コロンビア西部カウカ県ボパヤン生まれ。コロンビアを代表する現代美術作家として、国内外で高く評価されている。1970年代にコロンビア第三の都市カリにある美術学校 Escuela de Bellas Artesを卒業。学生時代に写真のイメージをもとにしたドローイングの制作をはじめ。写真だけでなく、版画、ドローイング、インスタレーション、ビデオ、彫刻など、表現手段は多岐にわたるが、写真及び映像メディアは常に中心的なテーマとして位置づけられている。

作品には水や息といった一過性の素材がよく用いられる。これらは、麻薬カルテルやゲリラ抗争による多数の死を日常のものとして受け入れざるをえない、1980年代、90年代のコロンビアでの体験に根差しており、永続することのない時間、記憶への詩的な反省をうながすものとなっている。展覧会「プロトグラフス (Protographs)」は、これまでのシリーズを「プロトグラフ」というテーマのもとにまとめたもので、コロンビア、ブエノスアイレス、パリなどで開催された。「プロトグラフ」は、写真が撮られ、イメージが永遠に固定される直前の瞬間、いわば潜在的な写真とでもいうべきものを指している。

2006年にはカリに「Lugar a Dudas (疑いの場)」を創設。アーティストのレジデンス・プログラムや、美術、政治を語りあう公共の場、文化センターとして重要な役を担っている。

<作家の言葉>

「ナルシス」シリーズは、私たちが日々慣れた顔を洗う水のごとく、洗面台を流れ去るセルフ・ポートレイトのビデオ・スティル。セルフ・ポートレイトのイメージは、シルクスクリーンと同じようにまずは写真の転写によるが、通常のシルクスクリーンの手法とは違い、スクリーンは洗面台の水面のやや上に水平にセットされる。そこに粉炭を撒くと、メッシュを粉炭が通る。そしてスクリーンを取り除くと、水面に炭で脆い絵が描かれている。ビデオが捉えるのは、水が流れるにつれ、ゆがみ崩れる水面の画だ。次に現れるのは、洗面台の底の画。水に浮かぶ画を捉えるために使われた光が、浮遊する埃の影を落としている。最後のシーンで粉炭が洗面台の表面に形容しがたい痕跡を残すまで、ポートレイトは様々な変容を遂げる。この一過的なプロセスそのものを作品と定義します。これらセルフ・ポートレイトの一過性と脆さには、すべてが虚栄でしかない「ソロモンの雅歌*」がこだましている。

オスカー・ムニョス

*「ソロモンの雅歌」は、旧約聖書にある男女の恋の歌をまとめた一編。



シリーズ「ナルシス」より
From the series 'Narciso'
2001-2002



第32回写真の町東川賞 <国内作家賞>

広川 泰士 (ひろかわ たいし)

東京都在住

1950年神奈川県逗子市生まれ。1974年に事務所を設立、雑誌や広告写真などで活躍する。福島原発事故後に再評価が高まった写真集『STILL CRAZY –Nuclear power plants as seen in Japanese landscapes–』（光琳社、1994年）は、1991年から93年にかけて、日本全国の原子力発電所（当時53基）すべてを、現代日本の風景の一部として撮影したもの。美しい海岸沿いに隠れるように建設されている巨大な人工物は、隠ぺいされてきた一大国家プロジェクトの現実を突きつける。同時期にはじめられ、現在も続く「TIMESCAPES」シリーズは、世界各地の砂漠地帯の巨大な岩山を、昼の光と長時間露光による夜空のイメージを二重写しにしたもの。人知を超えた時の圧倒的な力が写真に刻みつけられている。写真集『BABEL –ORDINARY LANDSCAPES–』（赤々舎、2015年）は、建設中の高速道路やビルの破壊現場、砂利採取のため掘削される山、災害現場などをとらえたもの。欲望に突き動かされ、自然を変容させていく人々と、それには無関心で遠大な時を刻む自然のあり方を対比的にとらえる視点から生みだされる作品群は、優れた文明批評となっている。

1986年「家族の肖像」にて講談社出版文化賞（写真賞）を受賞。2003年写真集『TIMESCAPES –無限旋律–』（青木書店）及び個展（東京都写真美術館、2002年）にて日本写真協会賞受賞。近年の展覧会に「BABEL ordinary landscapes」（キャノンギャラリーS、東京、2015年）、「TIMESCAPES 2016」（大正大学 ESPACE KUU、東京、2016年）など。2011～15年東京工芸大学芸術学部写真学科教授。

<作家の言葉>

日々、日常の中でポツ、ポツと気になる風景を写してきました。それらの断片が徐々に積み重なり17年程経つうちに、ボヤけた輪郭がだんだんハッキリし、自然と人間の営みの関係として、明確な塊りとなって見えてきました。今迄の私の作品制作の過程と違い、かなり漠然とした進行でしたが、大きな災害、原子力発電所の事故、後のこの時期にバラバラな断片が繋がり「BABEL」になりました。そして25年前に撮影した「STILL CRAZY」とも深いところで繋がっているような気が最近しています。私の理解を越えた大きな力に動かされ、ここ迄たどり着けたようです。「BABEL」を含む今迄の作品制作が評価され今回の賞をいただけた事に感謝致します。審査員の皆様、スタッフの皆様、有難うございました。受賞をこれからの大きな励みとして、今後益々精進してまいります。最後にいつも支えてくれている私の妻と息子たちに、感謝します。「ありがとうこれからも宜しくね。」

広川泰士



東京都新宿区 2006年8月
「BABEL – ORDINARY LANDSCAPES –」シリーズより



栃木県岩舟町 2008年11月
「BABEL – ORDINARY LANDSCAPES –」シリーズより



岩手県釜石市 2011年4月
「BABEL – ORDINARY LANDSCAPES –」シリーズより



福島県大熊町 2014年8月
「BABEL – ORDINARY LANDSCAPES –」シリーズより



1993年8月19日
美浜町 関西電力発電所
「STILL CRAZY–Nuclear power plants as seen in Japanese landscapes–」シリーズより



48, Jun. 21-22, 2001 Cathedral Valley, Utah, U.S.A
toward northwest
「TIMESCAPES –無限旋律–」シリーズより



第32回写真の町東川賞 <新人作家賞>

池田 葉子 (いけだ ようこ)

東京都在住

1965年石川県金沢市生まれ。1995年東京総合写真専門学校研究科修了。

日常に何気なく存在する風景を切り取りながら、現実を平面に置き換えることによって生まれる写真ならではの世界を、独自の視点、構成によって作品化する試みを一貫して続けている。

初の写真集『Incoming Light』(Le Pont Rouge、フランス、2015) は、2013年にベネルクス地方で撮影されたもの。複雑な影をおとす木洩れ日、ガラスや水の反射、舗道の敷石に刻まれた痕跡などが、現実の細部に宿る色彩や形態の妙を伝えている。二冊目の写真集『Monkey Puzzle』(Nazraeli Press、アメリカ、2015) は、2006年から14年までに、京都、岡山、東京、アメリカ、オランダなど、国内外を問わず撮影された写真で構成されたもの。自然と人工が織りなす様々なバリエーションをもった造形が、ウィットとユーモアに満ちたまなざしのもとに提示されている。

近年の個展に「sensation」(ギャラリーメスタージャ、東京、2015)、「Monkey Puzzle」(IBASHO、アントワープ、及びギャラリー・アートアンリミテッド、東京、2016)。グループ展に「リフレクション」(ブレイスM&M2ギャラリー、東京、2013)、「Secret Garden part 2」(ギャラリー・アートアンリミテッド、東京、2015)、「Regards de femmes」(Maison Folie、モンス、ベルギー、2015)、「Contemporary Photography Asian Perspective」(Lawrence Miller Gallery、ニューヨーク、2016) など。2013年、フィラデルフィア美術館作品買い上げ賞(第86回国際コンペティション写真の部)受賞。

<作家の言葉>

ありきたりな、どこにでもあるような風景を撮影し、印画紙という平面に置き換える。視覚のあいまいさ、遠近法のゆらぎ、色彩、構図がもたらす効果を意識して作業していく中で、対象に潜む面白さや美しさを引き出し、新たな世界を作りだしたい、私はそう思って作品を作り続けています。

写真を始めたのは20年以上も前で、極めてスローなマイペースでやってきました。華々しい賞などとは無縁だと思っていましたので、今回の受賞は本当に思いがけないもので、嬉しい驚きでした。

そんな私の仕事に光をあてて下さった皆様に、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

池田葉子



山形県西村山郡河北町
Kahoku Town, Yamagata Prefecture
2008



京都府京都市
Kyoto City, Kyoto Prefecture
2009



神奈川県足柄下郡箱根町
Hakone Town, Kanagawa Prefecture
2011



徳島県三好市
Miyoshi City, Tokushima Prefecture
2012



アメリカ合衆国マサチューセッツ州セイラム
Salem, MA USA
2013



岡山県真庭市
Maniwa City, Okayama Prefecture
2014

すべて写真集『Monkey Puzzle』より



第32回写真の町東川賞 <特別作家賞>

マイケル・ケンナ (Michael Kenna)

アメリカ・シアトル在住

1953年イギリス西北部ランカシャー、ウィドネス生まれ。バンベリー・スクール・オブ・アートで美術を、ロンドン・カレッジ・オブ・プリンティングで商業写真を学ぶ。77年よりサンフランシスコに拠点を移し、写真家としての活動をはじめ。

2002年より北海道での撮影を開始し、「ケンナの木」と呼ばれつつも現在は伐採されてしまった屈斜路湖畔のミズナラの樹をはじめ、各地を毎年のように訪れて撮影を続けている。雄大な自然だけでなく、人間の営為が伺える柵や鉄塔、名もなき樹々など、対象との静かな対話の時間のなかで生み出された作品は、豊かな詩情をたたえている。2006年、写真集『Hokkaido』（Nazraeli Press / 出版協同社）を出版。独自の美意識によってとらえられたミニマルな風景と、微妙な陰影に富んだ精緻な銀塩プリントは、水墨画、俳句の精神性を有するものとして、高く評価されている。

ヨーロッパ、アメリカ、アジア、北アフリカなど、世界各地で複数のテーマを持ちながら継続的に撮影を行い、今までに50冊以上の写真集を出版。日本での主な展覧会に、「In Japan」（東京都写真美術館、2006年）、「風景に刻まれた記憶」（北海道立釧路芸術館ほか、2009年）、「日本の形」（ギャラリー・アートアンリミテッド、2016）など。昨年には、日本で約30年をかけて撮影した作品をまとめた写真集『Forms of Japan』（Prestel Pub、ドイツ、2015）が出版された。

<作家の言葉>

北海道は、大切な宝物です。大いに興味をそそるかと思えば、静かに魅了し、危険なまでに野性的かと思えば、どうしようもなくロマンチック。果てしなく壮観な被写体を私と共有してくれる北海道に、深く感謝し、大いに恩義を感じています。とりわけ愛すべきは、冬の北海道。何層もの雪と氷で変容したその光景は、荒涼とした全き無垢なキャンバス。そこに生き生きと浮かぶ墨絵は、まさに目に見える俳句です。裸木、色の不在、不気味な静けさ——気を逸らすものが減ることで、一心に集中することが求められます。これはシリアスでクリエイティブな写真を生み出すには、申し分ないレシピ。これに熱い温泉、冷や酒、新鮮なホッケと賑やかなカラオケバーが加わって渾然一体となれば、もはや抗いがたい魅力です。北海道の写真に対して、第32回写真の町東川賞特別作家賞をいただき、言葉にならない感謝と誇りを感じます。過去14年以上にわたり、北海道は私の信頼できる友であり、誠実な仲間です。友との共同作業がこのような形で認められ、大変嬉しく思います。最愛の北海道をはじめ、関係者の皆様、ドウモ、アリガトウ、ゴザイマス。

マイケル・ケンナ



Hillside Fence, Study 6
Teshikaga, Hokkaido, Japan. 2007
(北海道 弟子屈)



Kussharo Lake Tree, Study 1
Kotan, Hokkaido, Japan. 2002
(北海道 屈斜路湖)



Philosopher's Tree, Study 3
Biei, Hokkaido, Japan. 2009
(北海道 美瑛)



Taushubetsu Bridge
Nukabira, Hokkaido, Japan. 2008
(北海道 糠平)



Torii Gate, Study 2
Shosanbetsu, Hokkaido, Japan. 2014
(北海道 初山別)



Winter Seascape
Wakkanai, Hokkaido, Japan. 2004
(北海道 稚内)



第32回写真の町東川賞 <飛弾野数右衛門賞>

池本 喜巳(いけもと よしみ)

鳥取県 鳥取市在住

1944年鳥取県鳥取市生まれ。最初の就職先である新聞社で写真と出会う。1967年日本写真専門学校(現日本写真映像専門学校、大阪)を卒業。1970年に郷里の鳥取市に池本喜巳写真事務所を設立。77年より写真家の故・植田正治の助手を20年近く務めながら、山陰の風土をテーマに写真を撮り続ける。1999年鳥取市文化賞受賞。本年4月には、山陰の文化を発信、醸成する場所として、事務所を改装し、「池本喜巳小さな写真美術館」を開館した。

1970年代から撮影をはじめたシリーズ「そでふれあうも」は、人々の内面に残存する山陰の風土と記憶のスナップショットである。並行して撮影が続けられるシリーズ「近世店屋考」は、1983年に撮影した鳥取市青谷町にある理容室を嚆矢とし、現在にいたるまで、高度経済成長のなか次々と姿を消していった金物屋、履物店、洗濯屋、釣具店、駄菓子屋など、約60業種100軒以上の店を撮り続けている。虎ノ門ポラロイドギャラリー(東京、1986年)での展覧会をはじめ、ニコンサロン(東京、大阪、2015)のほか、海外でも作品が発表された。

主な写真集に、『そでふれあうも』(G.I.P. Tokyo、1993年)、『池本喜巳作品集 鳥取百景』(鳥取銀行、1999年)、『近世店屋考』(合同印刷株式会社、2006年)、『因伯の肖像 未来への記憶』(今井印刷株式会社、2014年)など。

<作家の言葉>

1978年南仏アルルで開催された国際写真フェスティバルに、私は植田正治のアシスタントとして参加しました。世界から集まった写真家たちと早朝から夜中まで写真にどっぷりつかる夢のような日々でした。

そんなある日、イタリアの写真家アントニオ・ジョルジョ・ピアバティに連れられ、フランスの写真家、ベルナンド・プロッシュに会いに行きました。彼の人柄に敬服すると同時に、ビィンテージプリントの美しさにも圧倒され、衝撃を受けました。これが私の最大の不幸だったかもしれません。写真とは何かを追究するあまり、見てはいけないものを見てしまったのです。そのために非力な私は、すっかり押しつぶされてしまい、自己の才能に限界を感じ、しばらく写真が撮れませんでした。それが私にとって、「ふるさとを記録する」という内向的記録写真へ走らせる原因となったのだと考えます。

同郷の先輩である塩谷定好、植田正治の足跡をたどる気持ちもあり、ただひたすら山陰にこだわりレンズを向けてきました。『そでふれあうも』『近世店屋考』『因伯の肖像』『鳥取百景』『三徳山三佛寺』現在もなお進行形です。

池本喜巳



近世店屋考シリーズ 高木釣具店
鳥取県鳥取市瓦町 2007年



近世店屋考シリーズ 黒田商店
鳥取県鳥取市末広温泉町 1988年



近世店屋考シリーズ 但見酒店
鳥取県鳥取市弥生町 1999年



近世店屋考シリーズ 日光屋洗濯店
鳥取県鳥取市気高町宝木 1987年



そでふれあうもシリーズ
島根県松江市八雲町 1979年



そでふれあうもシリーズ
兵庫県三尾港 1974年

第32回 東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業・自由フォーラム2016～

<受賞作家作品展>

会期：7月30日（土）～8月31日（水） 会期中無休

時間：10：00～17：30（7月30日は15：00～21：00）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円、町外200円（7月30日、31日は無料開放）

海外作家賞……………オスカー・ムニョス

国内作家賞……………広川泰士

新人作家賞……………池田葉子

特別作家賞……………マイケル・ケンナ

飛弾野数右衛門賞……池本喜巳

●7月30日（土）

14：00～14：30 授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00 テープカット（会場：東川町文化ギャラリー）

15：30～17：00 レセプション（受賞を祝う集い）

●7月31日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー： 東川賞受賞者、東川賞審査員、ゲスト

■■■■ 写真の町とは ■■■■

1984年、東川町に開墾の鍬がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、このまだ若い町よりも、わずか半世紀ほどはやく生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出合いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出合いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル（愛称：東川町フォトフェスタ）」が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やシンポジウム、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えています。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる写真大会「写真甲子園」では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

そして2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し「写真文化首都宣言」を行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心地として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を果たしていきます。

■■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■■

●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞

写真の町東川賞＜海外作家賞＞	1名	賞金 1 0 0 万円
写真の町東川賞＜国内作家賞＞	1名	賞金 1 0 0 万円
写真の町東川賞＜新人作家賞＞	1名	賞金 5 0 万円
写真の町東川賞＜特別作家賞＞	1名	賞金 5 0 万円
写真の町東川賞＜飛弾野数右衛門賞＞	1名	賞金 5 0 万円

●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

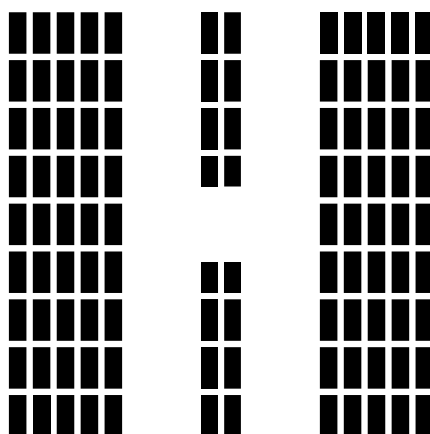
●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作品を、東川町長が委嘱した委員で構成する「写真の町東川賞審査会」において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念シンポジウム等を開催します。

●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、「写真の町・東川町文化ギャラリー」に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的の発展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。



〈お問い合わせ先〉

東川町写真の町実行委員会

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー
写真の町課・写真の町推進室（担当：窪田・北）

TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704

<http://www.photo-town.jp/>

※受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

※作品画像は受賞作家展出品作に限られません。